

生涯学習におけるところざわ倶楽部の役割

社会教育・生涯学習研究所所長 細山 俊男



1999 年 4 月に所沢市生涯学習センターが設置され、私は小手指公民館分館から異動してきました。その当時市民大学の担当は中央公民館でしたが、機構改革で市立公民館の連絡調整機能が生涯学習センターに移ると同時に市民大学の担当も生涯学習センターに移って、

私が担当することになりました。ちょうど 8 期の準備からでした。

1993 年に始まった市民大学の担当はもともと社会教育課でした。当時は企画委員会と運営委員会に分かれていて、企画委員会は学識経験者で構成され、市民が運営委員会を構成していました。しかし、中央公民館に移って予算が削減されて、学識経験者による企画委員会は廃止されました。その後公民館職員が企画にあたっていたようです。

講座の企画は市民参加で行うやり方をとっていましたが、私は 7 期の運営委員会のみなさんに企画委員会への参加を呼びかけたところ、大変なお叱りを受けることになりました。なぜ市民が企画までやらなければならないのか、と。当時の市民大学の「めざすもの」の第一に「市民参加による市民大学」とあったのですが、市民不在の企画ではどうにもなりません。

そこで、公民館で企画委員の経験を持つ中村直子さんたちに呼びかけ、企画委員会に参加してもらいました。市民が企画することの意義を確認し合い、なんとか立ち上げることができました。そのときの状況はその後の企画委員会では想像もできないでしょう。

初期の市民大学は人文科学系、社会科学系、自然科学系の 3 講座で構成されていましたが、新しい企画委員会で人間学、現代学、地方自治学（のちに地域学）の 3 講座にリニューアルしました。一般教養にとどまらない、實際生活に即した「新しい学び」への転換を意図したのです。

10 期の企画委員会では、「講義を聴くだけで学んだことになるだろうか」という市民大学の根本を問う議論が展開され、聴くだけでなく調査・研

究を行うグループワークが導入されました。初めは講義が 2/3、グループワークが 1/3 でしたが、13 期になると講義とグループワークが半々になりました。こうして主体的に学ぶグループワークが市民大学の特徴になりました。

しかし 3 講座が専門分化していくと、3 つにわかれている意味が薄れ、また他の講座も聴講したいという要望もあつたりして、市民大学の見直しが必要になりました。

そこで 13 期の企画委員をメンバーに「市民大学の新しいあり方検討委員会」を立ち上げ、検討した結果が今日の 2 年制の市民大学です。1 年次は総合コースで 2 年次はグループワーク。検討委員会の委員長は甲田和巳さんでした。

2 年制は 2007 年から 14 期の 2 年次と 15 期の 1 年次とが同時進行し、まるで市民大学が 2 つ始まったようでした。15 期の 1 年次は会場が早稲田大学キャンパスであったこと、また土曜日の午後開催ということもあり、比較的若い人が参加されました。2 年制になって一番困ったことは会場問題です。最初の頃は公民館を会場にしていたのですが、連続して確保することが難しく、旧庁舎と体育館、生涯学習センターが主な会場になり、開講式だけは松井公民館でした。2009 年に生涯学習推進センターが開所してから会場問題はすっかりなくなりましたが、事務局は田中和子さんと私で、会場確保のあの苦労は何だったのでしょうか。

「市民大学の新しいあり方検討委員会」は引き続き、「市民大学修了生のネットワークづくり」の課題に取り組みました。これが「ところざわ倶楽部」になるわけですが、2007 年 11 月に発足します。14 期の修了生が最初のメンバーです。会長は佐藤八郎さんでした。

市民大学のめざすものに「地域に学びをひろげる」とありますが、ところざわ倶楽部はこれを受けて存在しています。学びとは何か。ユネスコ『学習権宣言』（1985）には、学びは「人々を、なりゆきまかせの客体から、自らの歴史をつくる主体に変えていくもの」と謳われています。

ところざわ倶楽部 10 周年、「広場」も 101 号を迎えるこの時代に、私は人々の学びが平和な社会づくりにつながることを願ってやみません。